



6、水神社

〔社名〕ミヅノカミノヤシロ 九條家本、武田家本、いづれも「水神社」と記し、武田家本には「ミツ」と傍訓している。風土記の「水社」に相当する。

〔出雲神社巡拝記〕には「本庄村水谷上大明神、記云水社、式云水神社」としている。「雲陽誌」にも本庄に「水上明神、水神をまつる」としているので本庄に間違いはない。

現存の棟札には、延宝五年丁巳（一六七七）以降「水上大明神」「水上太明神」あるいは「水谷大明神」などとなっている。明治以降、式により「水神社」に復原した。

ミヅの語は文字通り水によるもので、小字名「水谷」もまたこれによるものと、思われる。

〔所在〕平田市本庄町六七四番地に鎮座する。

古来社地の移動はない。

一畑電気鉄道平田市駅からバス路線平田河下道を

約四キロメートル北進し、西田小学校から北に折れて大型農道松江線を東に約一キロメートル進んだ左側の水谷町内の入口にある。北山から南に突き出した約一〇〇メートルの山上に、ほぼ東南に向って鎮座している。

〔祭神〕天御中主神・罔象女之命・御井神を祀る。「雲陽誌」は「水神をまつる」とのみ記し、「巡拝記」には「みづのはのめの命」としている。後藤卷四郎氏の「風土記考証」には「水罔象女命」を祀るとし、加藤義成氏「風土記参究」でも「天御中主神、罔象女之命・御井神」としてある。もともと「みづはのめの神は、水を主宰する神で、いざなみの尊が火の神を生んで病み臥された時、その尿に成りました神である。御名義は「水這う」か「水走る」か「水生う」の義でると言われる。官幣大社丹生川上神社その他に祀られている。

〔由緒〕

創立年代不詳。「天正十年（一五八二）壬子十月九日、後藤神主敬白」と記す棟札が現在する。口碑によれば現在の松浦新七・松浦清の両家の祖がその建立者であったといい、代々本願をつとめ、すでに百代を数えるそうである。古くから地之水谷では勿論、近郷一带において水の神として尊崇され、雨乞の靈験あらたかなものとされた。

明治四年十二月村社に列せられ、大正六年十月、社殿の完備にともない、神饌幣帛料供進社にされた。

〔神職〕

後藤氏の世襲で、二十代を経ている。前述のごとく天正十年の棟札に「後藤神主敬白」とあり、また文録元年（一五九四）の棟札に「神主後藤」の記載が見える。社家は神社から約七〇〇メートル西の、小山一つへだてたところにあるが、かつては社地の近くにあって、いまも「よこや跡」と呼ぶ土地が残っている。

〔祭祀〕

近世には九月二十九日であったが、太陽暦施行後は、十一月六日となって今日に至っている。古伝祭として「神饌田の神事」があり、御供田の管理者が献穀をする。

これは前年末に御みくじをもって神饌田を定め、その一角に一坪をとり斎竹をもって囲い、その中でとれた初穂二升を献饌するというものである。例祭には獅子舞を奉納するが、この舞は近在に多くある獅子舞と異なり、独特のものである。

〔氏子崇敬者〕

水谷地区をもって氏子地域とし、現在の氏子は二世帯。

〔境内地〕一九一坪

境内には椎の木の老木がある。一本は目通り周四尋、一本は周二尋強。

〔社殿〕本殿・通田・拝殿・社務所からなる。本殿は大社造の変態で、間口一間、奥行一間半、銅板葺、通殿は切妻造、間口二間、奥行二間半、瓦葺。拝殿は切妻造、間口六間半、奥行二間。社務所は切妻造、間口二間。奥行一間半、瓦葺。

〔神紋〕二重亀甲に酢漿。

〔境内神社〕若宮神社、祭神（武甕槌命）